

第1編

先端医療の幕明け  
(昭和56年～63年)

## 第1章 「慈愛像」 建立

市立病院（加治屋町）の「1号館」（鉄筋コンクリート造り、地上5階、地下1階）が建設されたのは、昭和36年3月である。以来、38年2月に「2号館」が完成。さらに45年に第1次病院整備事業構想が決まり、翌年から「本館」建築に着手（48年完成）するなど整備が重ねられた。53年9月に第2次病院整備事業で「3号館」が完成。56年3月には第3次病院整備事業で「4号館」が完成した。地上3階、地下1階建て、延べ床面積1892平方メートルの4号館誕生である。事業費は、9億7300万円だった。

「4号館」の地下1階には、アフターローディング・リニアック操作室、全身用・頭部用CT操作室が入り、地上1階に厨房、2階に心電図室、肺機能室、脳波室、超音波室、3階に病理細胞診室等を配置した。これにより、市立病院のがん診療部門、生理機能検査部門、病理部門、給食部門等がさらに整備・拡充された。

### 小児科50床増床

56年4月、周産期医療センター（53年11月25日オープン）の新生児部門で20床が増床された。未熟児や重症新生児等の診療を充実・強化するもので、この結果、市立病院の許可病床数は561床（一般501

床、結核40床、産院20床）となった。

翌57年春になると、中央手術室中間期冷房設備工事が完了。さらに同年10月から11月にかけて、2号館小児科増床の関連工事と看護婦寮新築工事が始まり、ともに翌58年3月に完成した。

57年秋からの2号館4、5階の小児病棟新設工事（3億700万円）は、県の要請を受けたものだ。市立病院が当時調べた、九州・県庁所在地の公的病院の小児病床数は、福岡市が675床、熊本市305床、長崎市115床、宮崎市125床などである。これらに比べて鹿児島市は76床と少ない。このため鹿児島市内の小児患者は指宿や加治木の国立病院、さらに熊本、福岡の病院に入院するなどの状況にあった。小児病棟新設による50床の増床で、既存の19床と合わせて69床の小児ベッド数となった。50床増床に伴い、職員28人の増員を計画した。市立病院は増床について「独立した小児病院を新たにつくる場合、いろいろな診療科の専門医や看護婦、医療技術職員など相当数の職員、高度な医療器械をそろえなければならぬ。今回のように人的にも、施設のにもすでに整っている市立病院の一病棟として発足するため、経営上のプラス面は大きい。今後小児病棟の運営が赤字となり経営上の負担となる結果になった場合、運営費補助として県と改めて協議する」との経営見通しを立てた。

また、看護婦寮の建設は、56年度に病院利用者の駐車場用地として近隣の土地を購入し、駐車場として利用していたが、寮新築が必要となったため、この敷地に地上3階建て、延べ面積602平方メートルの寮を工事費9900万円で建設したものだ。建物の1階部分は、従来通り病院利用者の駐車場として使われた。

## 事業完了のモニュメント

昭和34年から20年以上にわたる病院整備事業が一段落したことを受けて、これらを記念するモニュメント構想が浮上する。昭和57年4月、モニュメント建立プロジェクト委員会が発足。翌58年3月「慈愛像」が出来上がり、同月30日除幕式をした。事業費は5700万円だった。

「慈愛像」の制作者は、長崎市生まれで日本を代表する彫刻家、富永直樹氏（大正2年―平成18年）である。作品には子供3人と母親、その足元に平和の象徴のハトが配される。制作当時、70歳だった富永氏は、平成元年に文化勲章を受章、翌年に長崎県名誉県民顕彰を受けている。台座の裏面には次の碑文が刻まれた。

「この像は 人類の慈愛と 市民に信頼され親しまれる市立病院を象徴するものであります  
当病院は 昭和十五年四月 南林寺町に鹿児島市立診療所として開設され 昭和二十年四月に名称を鹿児島市立病院と改めて今日に至っております 開設以来四十三年 その間多くの苦難を乗り越えてまいりました とくに第二次世界大戦の戦火により 病院施設を全焼しましたが 戦後いち早く復興に取組み 昭和二十三年から現在地において病院の整備を進めてきたのであります

その後 昭和三十四年から病院の本格的な建設に着手し 以来二十年余の歳月と多額の経費をかけ 今や南九州の中核的総合病院としての整備を見るにいたりました

ここに永年に亘る整備事業の完了を記念し あわせて将来への限りない発展と市民の幸福を願って この像を建立したものであります

昭和五十八年三月

鹿児島市長 山之口安秀

鹿児島市病院事業管理者

鹿児島市立病院長 上高原勝美

像の建立は、人類の慈愛をテーマに「永年の事業完了」「将来への発展」「市民の幸福」の意味合いを込めた。そして加治屋町の敷地内での病院整備が、ひとまず最大限まで達したという意味のモニュメントともなった。

式典に先駆ける2年前、56年3月の鹿児島市議会で、駐車場の混雑緩和対策の土地購入に関連して答弁に立った上高原勝美院長は「いわゆる病院の改築整備事業は大体一段階済んだというところ。済んだ後で病院の現状をみると、もうすでにすべての面において行き詰まっております。現在（病院敷地の）坪数が4000坪、平米にして1万3650平米。これに3万平米以上の建物が乗っかっているわけで、もう現在の土地の上に新しいものを持つていくということは、ほとんど技術的に困難です。しかし、医学界は日進月歩で施設、設備の整備は当然行わなければならない。そのためには土地が必要になるが、病院の敷地はもういっぱいだ、という現状に立ち至るのはもうそう遠くない」と分析し、「今後も営々として隣接地の土

地購入に努力し、将来起こる新しい医学に対応する施設のための準備をするのが私たちに残された課題。今後も予算の許す範囲内で土地購入をしたいと思うのでよろしくご了承をお願いします」と述べている。

さらに、同年56年9月の市議会で病院の将来構想について所感を求められた同院長は、こう答弁した。「私は昭和36年病院長に就任以来全く病院づくりでこの一生を、今日までを過ごしたとっていいわけです。36年から38年、そしていわゆる48年に完成した本館、さらには3号館並びに4号館と次々に病院をつくってまいりました。大体私は最初自分の夢に描いたものは、これでもって完成したと理解しておるわけです。これからつくるところの病院は、今日と面影を変えなきやいけない。と、申しますのはご承知の通り経済状態、あるいはあらゆる面において世の中が変貌しつつあると、それに私のような明治生まれの人間が、これを引き継いでいくというのは、これは失礼ではなからうか、そういうふうに考えておるんです」

「慈愛像」は、上高原院長自身にとっても大きな節目のモニュメントだった。同院長は、58年5月に厚生大臣表彰、同11月には勲3等瑞宝章を受章している。「慈愛像」は後年、新病院建設・移転に伴い移設された。



慈愛像